

国内研修成果報告書

私たちは7月26日から7月28日にかけての3日間を、「日雇い労働者の町」と呼ばれるあいりん地区を中心に国内研修をするべく、大阪を訪れた。

・子どもの里

昼頃に訪れ、子どもたちが子どもの里の近所の公園で水遊びをしている中に私たちも混ざり、子どもたちと交流させてもらった。その公園には子どもたちで作ったと思われる遊具がたくさんあった。水遊びをするコーナーも、木材を組み合わせ大きなすべり台を作り、ビニールプールを使いホースで水を流し、水遊びをしていた。その公園は隣に小学校があり、もともと公園としてのスペースではなく学校付属の緑が多いスペースであったことが分かった。そのスペースをハンモック、ブランコ、低めの木に梯子を付けて下に分厚いマットを敷いた飛び降り台、大きめの木の上には秘密基地があったり、子どもの里のスタッフ、子どもたちで遊び道具を手作りしていた。小学生たちが中心だったが、高校生くらいの子たちも楽しそうに遊んでいる姿が印象的だった。そこで私たちは夕方頃まで過ごした。そして、改めて子どもの里の理事長である荘保共子さんに直接お話を伺わせてもらった。最初に子どもの里、子ども夜まわりについてのDVDを拝見した。子どもの里についてのDVDでは、実際に子どもの里を利用する子どもたち、保護者たちのインタビューを交え、この釜ヶ崎にどれほど子ども里が必要なのかということが説明されていた。子への支援でもあり、親への支援でもあることが子どもの里の特徴だった。地域に子どもの里という第3の居場所があるのだ。「どこも受け入れてくれない。子どもの里が最後の砦だった」と述べる障害を持つ母親のインタビューを見て、この子どもの里は学童保育とは違ったポジションに位置していることがよく分かった。しかし映像の最後には、大阪市が子どもの里を学童保育化しようとする動きをとっているということも述べていた。

そして子ども夜まわりのDVDでは、子どもたちとホームレスの方々の触れ合いがどれほど重要なのかも分かった。中学生の暴力でホームレスの方が亡くなる事件が起き、子どもの里でもアンケートを行った結果、多くの子どもたちが「ホームレスは汚い、怖い」という意見を持っていた。それをきっかけに、1~3月の毎週土曜日、子どもたちとでおにぎりを作り、「体の具合はどうですか」など話しかける「子ども夜まわり」が始まった。映像内で子どもたちは「最初は怖かった。でも質問したら笑顔で返してくれて安心した」という、ホームレスの人々にプラスの意見を持つようになっていた。また、「自分一人だけだからどうでもいい」、「襲撃されても恨みはない」と語っていたホームレスの人々が強く印象に残った。

荘保さんのお話では、こどもの里の成り立った経緯、子どもの里の必要性を分かりやすく

教えていただいた。まず子どもを保護する施設は児童相談所だが、子どもは不安を感じるし、その間学校に通うことが出来ない。しかしこの子どもの里なら子どもが安心して学校に通うことが出来るということがよく分かった。

・釜ヶ崎フィールドスタディツアー

まず私たちは釜ヶ崎を見て回る前に、パワーポイントで釜ヶ崎が日雇い労働者の町になった経緯などを学んだ。そして漫画家でもあり、このフィールドスタディを実施している釜ヶ崎再生フォーラム事務局長でもあるありむら潜さんのガイドで私たちは実際の釜ヶ崎を見て回った。前日の子どもの里へ行く際にもこの釜ヶ崎を少し歩いて感じていたことだが、町全体から小便の匂いがしており、「小便禁止」などの注意書きをよく目にした。トイレが使えない、つまり家を持つことが出来ない人々がそれだけ存在するという現状を改めて感じた。また自動販売機の飲料が極端に安いのだ。ペットボトルでさえ 50 円で、100 円以上のもは見かけない。中には 30 円の缶コーヒーもあった。150 円のお茶を買う余裕がある人がそれほど少ないのだ。他にもドヤ街が印象に残っている。私たちも実際に前日にドヤに宿泊した。1 日の宿泊で約 1,000 円ほどだ。釜ヶ崎を歩くとそういったドヤを大量に見かけることになった。

日雇い労働者たちが集う施設へ行った。そこには大勢のホームレスの人たちがいた。施設の家は吹き抜け構造になっており、そこで夏の日差しをしのぎ、段ボールをしいて寝たり、将棋をしたり様々な人がいた。覚悟していたつもりだったが、かなりのショックを受けた。かつての高度経済成長期を支えてくれた人々がこれほど行くあても無いのだという現状に眩暈を覚えた。

その施設には効率的なシステムがいくつもあった。たとえば健康保険を利用することが出来ない人には、診療依頼権というものが利用できる。それは窓口でもらえて、料金はお金がある時に払えばいいそうだ。入院もできて、セーフティネットとして十分に機能している。また住所がない人のために、郵便物を預かり本人が受け取れるようにしたり、様々な配慮がなされていた。

私がこのフィールドスタディツアーで一番印象に残ったのはシェルターだった。簡易シャワールームがいくつか立ち並び、13 分ごとにアラームがなる仕組みになっている。寝床も 2 段ベッドが部屋内に所せましと並べられ、一見刑務所のような様子すらあった。エアコンはなく扇風機のみだ。冬の寒さなど想像もつかない。枕もないので日雇い労働者の人々は自分たちのカバンを枕代わりに眠るのだ。

そしてサポータティブハウスおはなへ行き、そこで暮らす方々のお話を聞かせてもらった。日雇い労働者としてレインボーブリッジを作った話、当時の西成地区についての話など興味深い話をたくさん聞くことが出来た。

・暮らしづくりネットワーク北芝

お話を聞く前に被差別部落であった北芝の近所を見て回った。私自身、部落差別については基礎的な知識しかなく、関わりも無かった為いまいち理解しきれていなかった。しかし私たちより少し年上のスタッフの方たちの世代でも、やはり部落差別というものはあるのだそうだ。被差別部落出身ということで結婚をすることが出来なかつたり、詳しく部落問題について知らなかったのも、この現代でも未だ完全に無くすことが出来ないほど部落差別が深刻な問題なのだと、改めて実感した。

また、北芝には参加型コミュニティカフェというものがある。このカフェは実際に借りて一定期間お店を出すことも出来るのだ。だから、自分の店を出す前に実際に予行練習がしたい人や、子どもたちとお店を出すイベントをしたい人などでカフェを行うことが出来る。北芝の町を歩いていて感じたことは、非常に住みやすそうだ、ということだ。緑が多く、広く遊びやすそうな公園がある。道には綺麗なタイルが並べられ、車が通る道路の隅には一定のスペースで色違いのタイルが並べてあった。これは車の運転者へ、「子どもが飛び出すかも」という意識を植え付けるための工夫だ。

そして北芝の方から、北芝の歴史、暮らしづくりネットワーク北芝の目的、活動など様々な話を聞くことが出来た。

暮らしづくりネットワーク北芝の重要性を感じつつ、私が一番興味を持ったのが、「まーぶ」という地域通貨だ。これは子どもたちがボランティアなどの地域貢献を行い、稼ぐことが出来る。子どもが大人や地域とのつながりを得て、また、社会の中で生きる力を身に付けていくことができる。この「まーぶ」は実際に加盟している店舗なら使用することが出来、箕面のスターバックスコーヒーやコンビニで買い物をする事が可能だ。

北芝には強い一体感があつた。だからこそスタッフや地域住民が一丸となることが出来ているのだろう。北芝を知り、まちづくりには地域のつながりが重要なのだと改めて感じた。